
悩めるキサラギ家の人々

東堂 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悩めるキサラギ家の人々

【NZコード】

N0473Z

【作者名】

東堂 司

【あらすじ】

月面都市の有力者、キサラギ家。遠く離れた火星政府でフリツツと名乗る末弟のリョウが、急遽帰つてくる事になつた。迎える兄弟たちは、火星で命からがら脱出する弟の苦労も知らず、それぞれに勝手な日常を送り、勝手な思いを抱いていた・・・。

カイルの場合（前書き）

リトル・ダミーの番外のようなお話です。フリッツの実家が舞台で、気がついたらけつこう個性的な兄弟が揃つてしまつたので載せてみました。連載形式にあります、長編ではなく読みきりです。

カイルの場合

ぐるりと囲んだ縁取りには、金細工による手の込んだ女神が映える、大きな鏡の前に立つて、カイルがネクタイを締めていた。

色は濃紺。光沢のある縦ラインが入った生地で仕立てたスーツは、本日下ろしたての新品パリパリである。

生まれながらの秀才。生まれながらのエリート。生まれながらの権力者……月面都市では絶大な権力を誇るキサラギ家の長男、カイル・キサラギ。御年三十五歳。きつちり分けられた七三の髪に、深い緑色の瞳は細めがちで、全体的にスマートな印象を与える容姿をしている。

どこか焦るような手つきで結びなおす横には、渋い木目調の窓枠にはめ込まれた、くもり一つない透明なガラスがある。

そのガラス窓の奥には、燃えるような真っ赤な木々が見えていた。一年中紅葉しつ放しのこの木々たちは、月面都市でも非常に珍しい種類で、キサラギ家のシンボルのような役割を担っている。

「お兄様」

ネクタイの結び目の太さがどうも気に入らないと、せっかく結んだのを解いて結びなおしているところへ、妹のエミリが声をかけてきた。

「リョウが帰つてくるんですって？」

「ああ」

弟の名が出た途端、カイルの表情が一気に不機嫌な色を浮かべた。元々、生真面目なカイルとは違い、末弟のリョウはすべからく自由奔放。家督を継ぐ重圧もない彼は、学校でも私生活でも、実に伸び伸びと充実した日々を過ごしてきた。

一方のカイルはと言えば、名門キサラギ家の長男。幼少時代は家督を継ぐための英才教育を徹底して施され、成人してからは御家を発展させるために奔走する日々。粉骨碎身、まさに骨身を惜しまず。

人生をキサラギ家のために捧げてきたという、長男の鑑のよつな人物だ。

自由などという言葉とは程遠い人生を歩んできた彼にとつて、末弟のリョウは……つまり、子供の頃から折り合いがあまりよろしくない間柄なのである。

しかしカイルもカイルである。

生真面目なだけならまだしも、神経質な上に自尊心が強く、何かというと他者を見下すような態度を取る性質がある。長男で頭の出来がいいから後継者としてやつていているのであって、これがもし、家督争いになどなつていったら、今の地位にいられたかどうか、甚だ怪しいと言わざるをえないのだ。

「ふん、あいつが帰つたところで、父さんの説教が待つていいだけだ」

「

キサラギ家の頂点に立つ、ショウ・キサラギ。

父でもある彼は、実子といえども当たりは容赦がない。

「せつかくキサラギ家の仕事を命じたというのに、あいつがした事といえば、俺の仕事を増やしただけだ」

「仕方がないわ。情勢が変わったんですね」

「ふん、優しいんだな」

真相を知らない妹に、思わず皮肉を言つ。

エミリはどちらかというとカイル寄りの性格で、カイルほどではないが、末弟のリョウに対して冷ややかだったはずだが。

「それも仕方がないでしょう？　そのまま行つたらあの子、火星で殺されてたのよ？」

いくら仲良しでないとはい、実の弟に変わりはない。政治道具にされた拳銃、殺されるのはあんまり過ぎると思つてゐるのだ。

「それともお兄様は、リョウが殺されても良かつたというの？」

「そうは言つてない」

「じゃあ……」

エミリがなおも言い募ろうとしたその時、入り口の扉がノックさ

れた。返事をするとエミリが行つて出迎えた。

「やあ、ここにいたのか」

入ってきたのは、もう一人の弟、ロイである。

「お兄様が出勤する前に、挨拶をと思ってね」

エミリは涼しい顔でそう言つと、

「それじゃお気をつけて」

と、右手をひらひらさせながら部屋を出て行つた。

「何しに來たんだ？」

首をひねつて肩をすくめる。

リョウが帰ると知つて、カイルがどんな顔をするのかわざわざ見に來たとでもいうような感じだったが。

「ふん！」

気分が悪い。

「兄さん」

「あ？ ああ、お前か」

そう言えばいたな。と思いつつ、

「何の用だ？ もうじき出るんだが」

せわしなく鞄を取り出し、『ごぞごぞやりだす。

このロイの性格は、一言で言つと温和、である。

優しくて人当たりはとてもいいのに、芯がしつかりしていてブレない。子供の頃からリョウの面倒もよく見てくれたし、気難しい父親にも気に入られてるし、カイルの扱いにも長けている。

ロイから見て姉に当たるエミリとは、つかず離れずの関係を保つてているようだが、だからとつて、この二人も仲が悪いわけではない。ただ単に、手のかかる家族が他に三人もいるから、比較的標準に近いエミリとはかかわり合つ機会が少なかつただけの事だ。

同じ理由で、母親とも無難な距離感を保つてていると言える。

この、キサラギ家で唯一とも言える、超まともなロイが、朝っぱらからカイルの部屋を訪れる理由はただ一つ。

「单刀直入に言つよ？ リョウの助命嘆願さ」

途端にカイルの顔が苦虫を噛み潰したようなものになる。

「回りくどい言い方したって、兄さんには伝わらないと思つたけど……やっぱり怒つた?」

「お前な、俺をバカにしてるのか?」

「してないよ、全然! でも、姉さんから探し入れられたんでしょう?」

「お前な、俺をバカにしてるのか?」

「ふん! ハニコの奴、自分が困ると向でも仕方がないの一言で片付けようとする」

「同情してるんだよ、さすがにリョウが可哀想だつて」

「お前らは甘いんだよ」

「そうかな?」

「そうなんだ!」

すっくと立ち上がったカイルは、

「時間だ。続々は帰つてからにしよう」

と言つて、ロイを伴い部屋を出た。

不愉快そうにしている割には、続きを話す気があるあたりが、カイルの生真面目さを表していふと言つてもいいだろつ。

「帰りはいつになるの?」

「さあな。……あ、そう言えばレイカから何か連絡はあつたか?」

「レイカ? いや、ないよ」

「……そうか」

「兄さんさ、何度も言ひけど、レイカとはあまり」

「言ひな」

ひしゃりと遮つた。

レイカといふのは、キサラギの分家筋、ササイ家の一人娘だ。血縁で言えば従妹にあたる。

そのレイカ、実は、人当たりの良さで敵なしロイの、苦手分野なのだ。

「ともかく、続々は帰つたら話す。いなかつたら打ち切りだぞ」

ロイの前でレイカの名前を出したのは失敗だつた。

彼女はリョウとは別の意味で自由奔放な女だ。その自由さ加減は、ロイに言わせれば、温厚な彼の許容を軽く超えているらしいのだが、正直カイルにしてみれば、リョウの方がよっぽど手に負えないし、レイカの方が可愛げというものがある。

そんなカイルの気持ちを知っている……といつても言つた覚えはないのだが、察しているロイは、カイルとレイカが親密にしている事を露骨に嫌がっている。

カイルがレイカと親密にしている理由は、単に気が合つだけの問題ではなく、仕事上のつながりもあってのことなのだが、それでもロイは嫌だと言つ。

まあ、嫌だと言われたところで、今更付き合いを変えるつもりもない。仕事上の付き合いはなお更、個人の好悪でするものではないのだから。

「行つてらつしゃい」

大勢の使用者たちの見送りを受けて車に乗り込んだ。見送り側の窓を開けると、すかさずロイが身を寄せてきて言った。

「ちゃんと、いるからね」

「ああ」

リョウの助命嘆願だと？　俺のほうが父さんに言つより楽だからつて……。

思わず舌打ちが出た。

数年前の、ある昼下がり。

午後の仕事もひと段落し、誰もがのんびりティータイムを堪能していたところへ、恐ろしく不機嫌な顔をしたカイルが帰ってきた。

「お帰りなさいませつ」

カイルの機嫌は、使用者たちの精神状態に大きく影響する。父のシユウの機嫌は……それこそ、命にも関わってくるほどだ。

「本日はお早いお帰りで」

口ひげについたクリームを慌てて拭いた執事長が、いそいそと進み出てカイルの鞄を受け取る。

「リョウはいるか?」

「はい。ただいまティータイムを……」

執事長に最後まで言わせることなく、片手を上げてそれを制止する、押しのけるようにして広間を横切った。

庭へ出る正面の窓とは別に、居間を突っ切った先には小さなテラスがある。そのテラスの一角で、白いガーデンベンチに身を埋めるようにして座っている、リョウの後姿を発見した。両足をベンチの上に乗せて、ひざを抱えるような格好でティーカップをすすっている姿は、とても良家の子息には見えない。

まるで引きこもりのそれだ。

腕を組んだカイルは、思わず顔をしかめてため息を吐いた。そうして気を取り直すと、声をかけるべく近づいていった。

気の合わない弟にわざわざ声をかける理由はただ一つ。

リョウの素行について、担当の教官から注意されたからだ。

本来ならばその手の話は、父親であるショウに行くのが本当なのだが、生憎シユウは普通の家庭の父親とは違い、子供の教育にまで神経を遣えるほど暇ではない。父には父の、キサラギ家当主としての仕事が、日々、山ほどあるのだ。

ゆえに、長男であるカイルが、父の名代として下の弟や妹の面倒を見ているワケだ。

「リョウ」「

声をかけるが、振り向きもしなければ返事もしない。

「ちつ」

少しだけイラッとしたが、今はここにこだわっている時間もない。夕方からまた、別件で会議があるので。正味十分でここを出なければならない。

「今日、シライシ教官に会つてきた」

呼び出しを食らうのはこれで一度目だ……今月に入つて、だが。

「お前が休み時間に、教室で堂々と酒を飲んでいるという事だが？」
リョウの素行の悪さは今に始まったことではない。ただ、悪いとは言つても不良の類とは違い、子供っぽいイタズラが過ぎるのだ。
例えば、教室のドアに強力な粘着テープを貼り付けて開かなくしてみたりとか、教官の引き出しに大量の爆竹を時限装置付でセットしておいたりなど。後日、引き出しを開けた教官が、よく漫画にある、火事で焼け出された人のような爆発頭でリョウを追い回す姿は、学校中の笑いを誘つたとか誘わなかつたとか……。

とにかく、彼のイタズラとはそんな下らないものばかりなのだ。
だから最初、彼が教室で飲酒したと聞いた時は、我が耳を疑つたのだ。
しかし、担当のシライシ教官は、カイル以上に真面目も真面目、
クソがつくほど真面目な人物で、到底嘘をついたり、また、確信もなく保護者を呼びつけたりするような真似はしない事を考えると、
リョウが教室で飲酒していたというのはほぼ事実だうつと思いつて、話を聞いてきたのだ。

ところが。

「……」

待てど暮らせど、返事がない。

「おい

さすがに腹が立つて、少々キツイ口調で声をかける。

「返事ぐらいしたらどうだ？ お前のせいで俺は、貴重なティーダイムをふいにしてまでわざわざ帰ってきたんだぞ！」

しかもよりによつて、秘書のケースが手作りのパイを差し入れに持つてきた日に限つてだ！

秘書のケースは男だが、手先がとても器用で、そんじょそこらの女なんかより、よっぽど料理が上手いと評判である。そんな彼の十八番はアップルパイ。ベタだが、これが実に美味く、プロをしのぐとさえ言われるほど。

ところがそれだけの腕を持っているのに、何を惜しむ必要があるのか、彼は滅多に料理をしない。だから差し入れのパイも次にいつ

食べられるかわからないのだからして、カイルがイライラするのも道理なのだつた。

「とにかくだ！ お前はまだ学生だろ？ 昼間つからのん気に酒など飲む身分じやないのはわかってるだろ？ そもそもお前は

……」

「おー兄貴、帰つてたのかー」

「普段から不真面目すぎるんだよー！」

「兄貴……？」

「いくらキサラギ家の三男だからって、何しても許されるワケじゃないんだぞ！」

「つーか、誰と喋つてんだ？」

「学生の本分……何つ！」

ぐるりと振り向いたカイルの目に、アイスキヤンティーをくわえながら、きょとんとしているリョウが映つた。

「リョ……はあ？」

ベンチの正面に回りこむと、等身大の人形が置いてあつた。

「何だコレは」

ツギハギだらけの人形が、ちょこんと座つている。

「あれ？ 兄貴知らねーのかよ。今、火星政府が極秘で作つてる人形

「火星で……？」

ふと嫌な予感がした。

まさかとは思うが……いやしかし、リョウがあの件を知るはずがない。

「そうやつ。国家機密だつてよ」

その瞬間に、カイルの両目がカツと見開かれた。嫌な予感ほど、的中するものである。

「リョウ、お前その話を誰から聞いた」

「あー？ 誰だっけな」

「思い出せリョウ！」

両肩をがつしつと掴んで、前後に大きく揺さぶった。

「思い出せリョウ。どういう事なんだ」

「あやややや……、これじゃあ思い出せねーよ」

「ふざけてる場合じゃない。いいからさつさと思い出せ!」

カイルがこれほどまでに焦るのも無理はなかつた。今、月面都市の中枢機関でもほんの一部の人間にしか知らされていない情報を、あらう事カリョウが口走つたのだから。

リトル・ダミー計画と呼ばれるそれは、生きた人形を大量に作り、何かしら政治利用するつもりらしいと言われているが、この時点では情報が不足していて、これ以上の事はわかつていなかつた。

しかし、火星内部で極秘に進められている事から、万が一それが、月面都市に悪影響を及ぼすものだとしたら困るという事で、早急な調査を必要としているのだ。

「リョウ」

ベンチに座つている人形は、勿論、ただの人形でしかなかつた。人の形を模したものを使用人に作らせたのだろう。これはこれでよく出来てはいるが、話に聞くリトル・ダミーとは比べ物にならない、本当にただの等身大のお人形である。その人形にリョウの服を着せているのだ。

「悪趣味な事をするんじゃない！」

思わず拳骨で「ゴチン」と頭を叩くと、

「痛え！」

大仰な叫び声を上げて、リョウが飛び退いた。

「もう絶対思い出さねーかんな！……あ、いや、思い出せねーの間違いだ、うん」

頭頂部をさすりながら、口元を歪める。

「とにかく忘れた！　あー忘れた忘れた！」

「じゃあな！」とだけ言い残して、カイルが止める間もなくビードモへ消えてしまった。

結局あの日以来、リョウが口を割る事はなかつた。

「リョウか」

カイルの本心も、ロイヤヒミリとそんなに変わらない。いくら氣が合わないとは言つても実の弟だ。政治利用までは許せても、殺されるのまでは許せるはずがなかつた。

父親のシユウだけは、半ば覚悟の上だつたようだが。

「ふん」

意味もなくリティンドーを小突いた。コン、と間抜けな音がして、呼ばれたと勘違いした運転手がミラー越しにカイルを見ていた。

「……なんでもない」

甘いのは俺も同じだ。そう思つと氣が滅入つた。

いずれキサラギ家の当主としてやつていくとなれば、シユウのようないかなる場合も『冷徹』でなければならない。それなのに、火星で今にも処刑されると知つて、土壇場でリョウの命乞いをしたのは、他ならぬカイルだったのだ。

そして。

「今度もまた、俺にアイツの尻拭いをしるど」

父に会えば……さすがに殺されはしないだろうけど、それでも何らかの罰を受けさせられるのは必至。だから、ヒミリたちの言う助命嘆願とは、言葉通り命を助けて欲しいというものではなくて、リョウへの厳罰をどうにか赦して欲しいという事なのだ。

ぼんやりと窓の外の景色を眺めていた。

カラフルな外套に身を包んだ人々が、寒さに鼻を赤く染めながら買い物をしている姿が印象的だ。

月面都市にも、お祝いの日はある。

冬の祭典に向けて準備を進める人々の、活気溢れる姿は、いずれも楽しげなものばかりだった。

資源によつて潤う国家。

豊かな暮らしを約束された国民。

明るい未来を目指す社会。

カイルの目に映る今月は、華やかで賑やかで、そして眩しかつた。

窓の外、次から次へと流れる景色が、次第にカイルの眠気を誘う。

「着いたら起こしてくれ」

事務的に告げると、腕組みをして目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473z/>

悩めるキサラギ家の人々

2011年12月1日21時52分発行